

第 65 回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会報告

研究部 沼 畑 早 苗

1. はじめに

2024 年度の全国国立大学附属学校連盟高等学校部会研究大会は、本校が会場校となり、10 月 11 日（金曜日）、12 日（土曜日）の両日、下記の日程で開催された。「地歴公民科」、「外国語科」、「生活指導」、「附属のあり方」の 4 分科会を設け、日頃の研究成果や課題を共有し合うとともに、お茶の水女子大学の協力を得ながら、「ジェンダー・イノベーションと教育」等について学ぶ有意義な時間となった。

2. 実施概要

2.1. 日程

第 1 日（10 月 11 日（金））

9:30	10:00	10:30	12:30	13:30	15:30	16:00
受付	全体会	分科会 1	昼食	分科会 2	準備会	

第 2 日（10 月 12 日（土））

9:30	10:30	10:45	12:15	12:45
分科会 3	休憩	講演会	高校部会総会	

2.2. 講演会

(1) 講演者：石井クンツ昌子

お茶の水女子大学 理事・副学長 ジェンダー・イノベーション研究所長

(2) テーマ：「ジェンダー・イノベーションと教育」

(3) 概 要

日本では文化・社会的な性を表す「ジェンダー」という言葉は広く知られるようになったが、「ジェンダー・イノベーション」(Gendered Innovations, 以下, GI) の認知度はまだ低い。GI はスタンフォード大学の科学史専門のロンダ・シービンガー教授が 2005 年に提唱した概念だが、きっかけとなったのは過去の様々な分野の研究の多くが男性研究者によって行われてきたこと、また男性やオスの動物を対象として実施されてきたことに意義を唱えたことだ。そして、男性に偏った視点を是正するために、性差やジェンダー差、そして性差と年齢などの他の属性的な変数との交差性を取り入れる GI のアプローチを提唱したことから始まった。この GI 視点はその後、医学や薬学などの分野で注目され、性差の視点を取り入れた結果、例えば有病率に性差が見られる疾患があったり、がんの部位別死亡率が男女で違っていたり、同じ疾患でも男女間で発症時期や症状が違っていたり、薬の効き目に男女差があることなどがわかってきた。

本講演では第一に性差・ジェンダー差を考慮する GI が注目を浴びてきた背景を探り、様々な分野における GI 視点を用いた研究の事例について概観した。第二に、教育のコンテンツや環境などにおける GI 視点の有用性について説明した。第三には、お茶の水女子大学において 2022 年 4 月に

新設した日本初の GI 研究所の活動について触れ、最後に特に教育における GI アプローチの今後の課題について考察した。これらのトピックから教育現場で GI 視点がどのように役立つのかについて考えていただく機会とした。

3. 発表概要

本校からは 5 名が以下の 4 件の発表を行った。内容については、次ページ以降を参照されたい。また、生活指導分科会においては、お茶の水女子大学生生活科学部心理学科の山田美穂教授の司会の下、3 名の同学科教員による講演も行われた。

(1) 地歴公民科分科会

- ・「歴史総合と私たち」～歴史総合の学びと課題～（山川 志保）
- ・「地方自治は民主主義の学校」に学校で取り組む～「公共」大項目 C の実践事例～（飯島 裕希）

(2) 外国語科分科会

- ・「英語による STEAM 活動：英語を用いた教科横断型活動の実践」（金子 麻子）

(3) 生活指導分科会

- ・「コロナ後の自治会行事について考える」（十九浦 美里）

生活指導分科会におけるお茶の水女子大学生生活科学部心理学科の教員による講演

「高校生の「問題行動」の理解と支援—不登校・非行・レジリエンスの心理学—」

講演 1 伊藤大幸「不登校・非行の要因とメカニズムに関するエビデンス」

不登校・非行などの情緒・行動問題の効果的な予防・介入のためには、その発生の要因とメカニズムを理解することが重要である。本講演では、不登校・非行に関する最新のエビデンスをレビューするとともに、講師が関わっている大規模な縦断研究の知見を紹介し、不登校・非行の予防・介入のためのヒントを探った。

講演 2 平野真理「各々の持つレジリエンスへの気づきと促進」

ストレスフルな状況において、心を回復させ適応する力であるレジリエンスは、すべての人が持っている力であるが、その回復や適応のあり方には個人によって異なる。生徒の持つレジリエンスを理解するための視点やツール、それらを通して見えてくるレジリエンスの多様性、介入実践の効果研究から見える可能性について紹介した。

講演 3 高橋 哲「自分を傷つけることと他人を傷つけること」

リストカットなどの自傷行為は近年多くみられる現象である。そうした行為と無縁そうな非行少年少女にも自傷行為歴を有する者が多くいる。本講演では、一見矛盾した現象に見える自傷と他害の相互の関係をとり上げながら、一般に「問題」とみなされる行動を理解するための観点を紹介した。

(4) 附属のあり方分科会

- ・「スーパーサイエンスハイスクール第Ⅱ期へ—科学の力で未来を共創する女性リーダーの育成—」（沼畑 早苗）

3. まとめ

事後アンケートでは、分科会における研究発表だけでなく、ジェンダード・イノベーションや生活指導の講演がためになったという声が多く寄せられた。「お茶大ならではのトピックで内容も先進的」「今まで意識したことのなかったテーマで、ためになった」といった感想をいただき、成果を得られた一日となった。

「歴史総合と私たち」～歴史総合の学びと課題～

地理歴史科 山 川 志 保

1. はじめに

高校で段階実施であった新学習指導要領（平成 30 年告示）は、2024 年度に 3 学年全てで実施となった。お茶の水女子大学附属高校では、1 年次に必修科目として歴史総合を設定していることから、その実践は 3 年目となった。歴史総合には、様々な課題¹がこれまでも指摘されているが、本校が実践研修協力校事業のなかで取り組んできた、生徒自身がどのように「歴史総合」を学ぶ意義などを捉えているかを、これまでの研究（紀要・発表・報告含む）²を踏まえて、改めて実際に授業実践多く取り組んでいる全国の国立附属高校が集まる場で議論したいと考えた。また、実際に「歴史総合」との接続を意識した「世界史探究」の授業実践の一例を示し、「接続」で課題と感じていることを報告した。なお、本校での「世界史探究」（3 年選択科目）は実施 1 年目である。

2. 報告での課題と今後の展望

これまでの取り組みを改めて見直しつつ、「歴史総合」だからこそできる「現代的な諸課題」のあり方と、地理歴史・公民科科目の必修科目「公共」や「地理総合」との棲み分け、ないしは「それぞれの特色を生かした探究のあり方」を考えていく必要性を課題として提示した。また、「世界史探究」との接続に関して、ことに「諸地域の歴史的特質の形成」などでどのような資料を活用することが望ましいのか、「歴史総合」の「現代的な諸課題の形成と展望」を踏まえて、どのように「地球世界の課題」の課題設定や探究を実際に進めていくかを改めて考えていく必要性を感じた。今後はこの点を自分の課題として追究していきたいと思う。

1 ①歴史総合の「世界との中の日本」の歴史をどのように構成するか ②2 単位という授業時間内で歴史総合の授業が「最後まで終わる」のか ③「問いの表現」や「現代的な諸課題の形成」「現代的な諸課題の形成と展望」をどのように設定して、年間授業計画に組み込むか ④後継の世界史探究や日本史探究との接続などがあげられる。この点は下記の紀要・報告でも論じている。

2 詳細は拙稿「生徒が描き出す＜歴史総合＞」『歴史学研究』1032, 2023.2, p.38～45 及び拙稿『『歴史総合』で培う力～『歴史総合』を生徒はどう感じ、どのような力を身に付けたのだろうか～』『お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要』第 68 号.2023.p.129～143. 全歴研第 64 回研究大会（東京大会）第一分科会（シンポジウム）報告「歴史総合・探究構想と実践から 生徒は歴史総合をどのように感じたか」2023.7.28.（『全歴研研究紀要 60 集』2024.3 にシンポジウムの詳細報告掲載）を参照のこと。また、上記の紀要などに加えて、シンポジウム「さあ、「歴史総合」を始めよう！ー歴史教育の未来を拓く VIー」「どのような授業を作るか近代化と私たち」報告 2022 年 3 月、令和 5 年度高等学校各教科等教育課程研究協議会における「D(4)現代的な諸課題の形成と展望 の実施のために」、東京外国語大学 海外事情研究所主催第 3 回歴史総合研究会（2024.3.25）での授業実践報告「歴史総合とその実践～生徒からみた歴史総合の学びとは～」などのこれまでの発表や報告を基にし、この全附連では報告を行なっている。（報告における生徒アンケートの使用はほぼ同一である。）

*この報告書は、全附連研究会当日に配布された発表要旨及び配布資料に基づいており、重複している。

「公共」における探究学習の実践事例

一文京区と連携した主権者教育―

公民科 飯 島 裕 希

1. はじめに

2023 年 12 月から 2024 年 3 月にかけて取り組んだ、高 2「公共」大項目 C の授業実践について報告した。「公共」は、2022 年度に始まった高校新課程で新設された公民科の必修科目であり、その内容は、青年期、帰結主義と義務論、個人の尊重といった人間の在り方や公共的空間の基本的原理について学ぶ大項目 A、法・政治・経済に関する 13 の主題について学ぶ大項目 B、年間のまとめとして探究を行う大項目 C から構成される。新課程が始まってまだ十分な時間が経っておらず、公表されている大項目 C の実践事例は多くはない。そこで、大項目 C の内容や進め方について、また歴史総合・地理総合や総合的な探究の時間との効果的な連携等について検討したいというねらいをもって、大項目 C の授業実践を報告した。

2. 授業の概要

お茶の水女子大学附属高等学校が所在する東京都文京区の職員と連携し、文京区の「文の京」総合戦略（素案）」を踏まえて、高校生から文京区職員に向けて政策提言を行うという実践を行った。2023 年 12 月下旬から週 1 時間を大項目 C の時間とし、冬休み課題として「文の京」総合戦略（素案）」へのパブリックコメントの作成、1 月に文京区企画課長による講演と質疑応答、2 月にクラス内での成果発表会、3 月に文京区職員に向けた提言のプレゼンテーションを行った。本実践の詳細については、紀要 pp. 25-33 「「地方自治は民主主義の学校」に学校で取り組む 一文京区と連携した「公共」大項目 C の実践事例―」を参照されたい。

3. ディスカッション

全附連当日の質疑応答について紹介する。

文京区在住の生徒とそうでない生徒には視点の違いはあったか、また生徒の居住地の違いを踏まえて授業者は指導を変えたか質問があった。前者について、解決策を考えていく事例を選ぶ際に生活感が出るかどうかの違いがあった。たとえば、文京区在住の生徒が複数含まれていた班では、自分たちが自習スペースを見つけることに苦労しているという課題意識から、区立図書館のあり方についての提言を考えた。後者については、生徒の居住地の違いは意識せず、責任をもって政策担当者への提言を考えるように指導した。

次に、学習計画について、文京区職員に政策を提言し、それに対するフィードバックを踏まえて生徒が提言案を再検討する時間を設けたかについて質問があった。この点について、提言発表会を通じて学んだことについて一人ひとり振り返りを記述はしたものの、時間的な制約もあり、フィードバック後に提言案を見直す時間は設けられなかった。実際の政策担当者のフィードバックを踏まえることで、「妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に自分の考えを説明、論述する」という学習指導要領の目標に近づくとは思われるが、発表を前倒しにすることは十分な準備時間が取れないまま提言を行うことになる懸念もはらんでおり、今後の検討課題としたい。

時間の都合上、歴史総合・地理総合や総合的な探究の時間との効果的な連携等については十分な意見交換ができなかった。この点については、今後も様々な機会をとらえて考えていきたい。

実践報告：英語を用いた教科横断型活動の実践

—英語による STEAM 活動—

英語科 金子 麻子

1. 背景

中央教育審議会は諮問「新しい時代の初等中等教育の在り方について」（平成 31 年 4 月 17 日）において、STEAM 教育を「Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics 等の各教科での学習を実社会での課題解決に生かしていくための教科横断的な教育」と定義し、新しい時代に即した高校教育の在り方を考えるうえで STEAM 教育を推進していくことを検討していくよう要請している。その後、内閣府総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループは令和 3 年 12 月 24 日に「Society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」＜中間まとめ＞を発表し、STEAM 教育は「サイエンスをベースに、異分野への興味関心、多様な知の受容力、社会的文脈や社会的課題への感覚を養う」ものであるとし、教科の枠を超えて統合的に問題解決に取り組む新しい形の学びとして STEAM 教育に大きな期待を寄せている。このように、STEAM は新しい教育の形態として注目を集めている。

一方で、学校教育での英語の指導においては、文法・語彙の習得や読解スキルといった知識獲得のための従来型の指導と、コミュニケーションツールとしての英語の使用機会の提供という、異なる二つの役割が求められており、教員はこの二つをバランスよく提供するために様々な工夫を凝らした授業実践を行っている。本校は SSH 校として科学的な視点に基づく思考力の育成にも注力しており、SSH プログラムの一環として「教科の SSH 化」を進めている。その様な背景のもと、コミュニケーションツールとして英語を「使う」場所を提供するとともに、その過程で英語を「学ぶ」ことも視野にいた、高等学校における英語の授業内外での STEAM 分野の実験・体験活動を行うことを試みた。

2. 本校での取組

当日の発表では、2022 年から 23 年に実施した英語を使用して実施した以下の教科横断型活動について、活動内容や生徒の反応などを報告した。

- ① 課外活動としての STEAM 活動：英語を使用言語として科学分野の実験・体験活動を行う課外プログラム「STEAM×English」（2022 年に 3 回実施）
- ② 「教科の SSH 化」の一環としての STEAM 活動：「英語コミュニケーション I」の授業において、レーズンと炭酸水の実験（物理分野）を実施（2023 年 12 月）

3. ディスカッション

全附連当日の質疑応答としては、教科横断型の取り組みを行うこととなった背景や、通常授業に教科横断型の内容を定期的に取り組むことに関する質問などがあつたほか、外国語分科会全体に関する感想として「即日にでも授業に取り入れられる取り組みもご紹介いただき、大変参考になりました」「大変刺激的でした。発表内容も興味深かったですし、質疑応答も噛み合っていて、とても勉強になりました」「様々な意欲的な取り組みを知ることができて刺激になりました」などの感想が寄せられた。

コロナ後の自治会行事について考える

指導部 十九浦 美里

1. はじめに

本校の自治会行事は、生徒間のたてのつながりを軸にその伝統を引き継ぎながら実施されてきた。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により 2020 年度の輝鏡祭（体育祭，文化祭，ダンスコンクール）がすべて中止となり，第 5 類感染症に移行し制限が緩和された 2023 年 5 月まで，制限があるなかでの実施が余儀なくされてきた。制限が緩和されたからといって，元の形に戻すというわけではない。制限があるなかで創意工夫をしながら培われてきたものも生かしながら，生徒の変容や，学校をとりまく環境にあわせて，今後の自治会行事を生徒とどう創っていくか，考える機会としたい。今回は輝鏡祭の中の体育祭に焦点をあてて発表を行った。

2. 体育祭 2019 年から 2024 年の軌跡

2019 年から 2024 年までの体育祭の実施状況は下記の表のとおりである

年度	輝鏡祭テーマ	実施予定時間	競技数	保護者の観覧	その他
2019	新時代	9:00～15:30	16	人数制限なし※	
2020	輝鏡祭（体育祭・文化祭・ダンスコンクール）はすべて中止				
2021	再輝	9:00～12:00	7	オンデマンド配信	午前中のみの実施
2022	“CHA” OS	9:00～13:00	7	オンデマンド配信	入場パフォーマンス
2023	Chameleon	8:50～13:00	8	各家庭 2 名まで	大玉送りを追加
2024	暁	8:50～13:10	9	人数制限なし※	応援ダンスを追加

※体育祭は従来から非公開（一般公開はしていない）で，観戦できるのは生徒家族のみ。2023 年より暑さ対策のため，体育館に休憩室を設置した。

3. 今後を考える上でのキーワード

① 競技数

2024 年度の事後生徒アンケート結果によると，競技数について「適当であった」と回答した生徒は 83.1%，少なかったと回答した生徒は 15.5%であった。また 2 回あった土曜日練習に一度も参加しなかった生徒は 17.4%，日曜日練習は 45.7%の生徒が参加しないという回答であった。2021 年度は午前中で終わらせるという制限があり競技数も「7」に絞られた。そこから，制限の緩和に伴って全体競技である大玉送りや応援などが形を変えながらも復活し，2024 年度は午前中に 6 競技 → お昼休憩 → 午後：応援＋2 競技の形で実施された。競技数は「9」と，従来の「16」には遠く及ばないが，それでも，体育祭後の写真撮影や片付けも含めると終了時刻は 14:30 頃となっている。暑さも気になるなか，時間的にも生徒の体力的にも今の段階では適当であったと考えている。昨今の生徒の忙しさやアンケート結果をみても，まずはこの競技数「9」のまま内容を充実させていくことが重要であろう。一方で，「やらなければできるようにならないのではないか」という教員の意見もでている。生徒，学校の状況もふまえ，安心，安全そして行事を通してどんな生徒の力を育てたいのかをふまえながら今後も慎重な検討が必要であろう。

② 対面でのコミュニケーションの充実

行事の中だけではないが、コロナ禍での三密を避けてきた状況やスマートフォンの普及も伴ってか、対面でのコミュニケーションが希薄になってきている印象がある。教室に行って伝えれば済むこともメールで連絡したり、係会合を開いても、その場で意見をだしあったりすることが少なく、「あとはメールで連絡します。」で終わってしまうようなことがあった。教員側が係会合などを見守り、必要に応じた指導・支援を意識的に行いながら、生徒たちが対面で行うことの意義、よさを生徒自身が実感することが重要であり、行事を通した様々な活動の中でそういった経験を生徒が積んでいくことの大切さを改めて感じている。

③ 学校行事、自治会行事としての体育祭とは。

従来は、全員競技＋学年競技＋選択競技 に全員が参加する形であったが、コロナ禍で競技数が減った際に選択競技にでる人とでない人が混在する状況となっていた。2024 年度、全体競技が 2 つ、選択競技が 3 つある中で、選択競技について被りなしで従来の形に近い形で出場者を決めた団と、被りありで決めた団があることが発覚した。

「体育祭は学校行事でもあるから、なるべく全員がでられるようにした方がよいのでは。」という意見と、「出たくない人を無理やりだすよりは、被ってでも出たい人がでる方がよいのでは。」という意見が生徒からでた。従来の形と照らしつつも、体育祭の在り方体育祭の目的とは何か、を問われるような問題であり、実行委員会で次年度に向けて話し合い指針を決定することとなった。以前は当たり前だったことが、そうではなくなった例の 1 つであり、こういう機会にもう一度なぜそうだったのか、今もそれでよいかを、生徒とともに検討していきたい。

4. おわりに

予行に関する質問があった。本校では体育祭のある週の火曜日に予行を設定している（体育祭は土曜日に実施）。予行では極力教員は手をださないようにしている。私自身は、この予行で様々な問題が起きて、本当に自分たちが進めないと進まないのだということを生徒が実感することが非常に重要であると考えている。予行を経験することで、生徒ひとりひとりが自分ごととして何が問題であったのかを認識し、係会合で 3 年生からの的確なアドバイスをもとに、しっかり立て直していく。本番は、本番ならではの問題も起きるが、それぞれの係の動きや進行はみちがえるようによくなり、私自身はこれも体育祭の醍醐味の 1 つだと感じている。質問があった学校は、予行は必要ないのではないかというスタンスでもあり、本校の形とは違う形で運営をされているようであった。時間の関係で詳しく伺うことができなかったが、体育祭の在り方も学校ごとに違うと感じた。

スーパーサイエンスハイスクール第Ⅱ期へ —科学の力で未来を共創する女性リーダーの育成—

研究部 沼 畑 早 苗

1. はじめに

お茶の水女子大学附属高等学校は、2019年度より継続して文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けており、2024年度で7年目（第Ⅱ期2年目）を迎えた。管理機関であるお茶の水女子大学と同一キャンパス内に位置している環境を活かした研究開発に取り組んでいる。

2. 科学の力で未来を共創する女性リーダーの育成に向けて

理数系教育および科学の視点を重視した課題研究の推進を軸としたカリキュラムを、以下のような概要で実践していることを報告した。生徒が優れたロールモデルに触れ、同世代と研鑽できる環境を整備するとともに、女性科学技術人材の裾野拡大にも注力している。また、本校の研究開発報告のプラットフォームである「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」についても広く周知した。

国立大学法人お茶の水女子大学附属高等学校 SSH 第Ⅱ期

科学の力で未来を共創する女性リーダー育成カリキュラムの実践



- ✓ 理数系教育及び科学の視点を重視した課題研究の推進
- ✓ 「挑戦と研鑽」の重層的ネットワークの構築
- ✓ 教育実践の成果普及、女性科学技術人材の裾野拡大

卓越した能力を発揮する
突出人材の輩出



教材論文DB

3. おわりに

管理機関であるお茶の水女子大学との連携に関しては、特に多くの質問が寄せられた。全学部の教員がリレー式で講師を務める高大連携科目「課題研究入門」や、2024年度より運営を開始した「課題研究支援プログラム」などについて、具体的な情報共有を行うことができた。また、自校の特色を活かした研究開発の在り方を改めて考える良い機会ともなった。